

に九〇cmの「ヘドロ」が堆積したということである。この堆積状況から見ても湖水の自然条件がいかに悪化しているかがうなづける。

加ふるに今後「水ガメ化」により湖水は流動性を失ない、流域の人口は加速度的な勢いで増加して行くことが明白であるから、現況のまま放置すれば「ヘドロ」の堆積率も年々増加して、三五〇年から四〇〇年後には、更に六m以上も堆積して湖水は排除されて陸地化して行くと思考される。

これは、遠い将来のことであるが、現在堆積してある「ヘドロ」の量を全水域平均九〇cmと見るなれば二億立方m余となるが、これを半量と見ても一億立方m余の膨大な「ヘドロ」が湖底に堆積してある。この状況であるから水位より「ヘドロ」層の方が深い水域が各所に見られ、ちよつと強い風が吹くと、湖水はたちまち汚濁する。これは、浅い湖に多量の「ヘドロ」が堆積してある証拠であり、この膨大な「ヘドロ」をある程度浚渫して、湖の老化現象を防止して行くこともまた利水の面から絶対必要な条件である。

ところが、これをどこに、どう処理するか？ 今日なお、具体案がなく、大きな課題となつてある。然し利水事業の工程として「ヘドロ」の大掃除を先にやらなければなら

ない段階に至つており、順序を間違えると後難を招くことになる。

◇ 琵琶湖と霞ヶ浦 ◇

現在、琵琶湖に於て、国の開発特別措置法に基き総合的な工事が進められてあるが、本湖は面積六七五方Km、その水面は海拔八六mの高地帯に位置し、最深部は百四m、平均水深四一m、水量は霞ヶ浦、北浦の三〇倍をこえ、利水目的には最適な自然条件を備えてある。

これが開発に当り、水産上の重要性を考慮して、琵琶湖生物資源調査団（団長、宮地伝三郎博士）が組織され水と底質の無生環境と生物環境の分析に関連して重要魚種の生産調査研究が約三年間にわたり詳しく行なわれ、利水による対策基礎資料が明確に打ち出されてある。

これに比較し、霞ヶ浦の最大水深は七m、北浦では、一五m、この平均水深が四mであり、霞ヶ浦だけでは、三五mに過ぎず、極めて浅く、水面までの海拔は一mを過ぎない。また、利根川水系としての自然的条件も失なわれて水交は断絶固立するに至つてある。ここに膨大な「ヘドロ」が堆積して、時代的に見れば海跡湖として陸地化現象をたどつて現在に至つてある。このような特異な環境にあるので、これが利水事業は総合的には勿論、緻密な調査と研究基礎がないと、流域住民の福祉にはつ